同窓会基金募集目標額目前に

【5万円】
9回　又平連太郎，鈴木弘夫
22回　宮島重広
26回　鈴木英生
【2万円】
9回　金沢　徹
18回　小沢寅男
25回　町塚　昭
【1万円】
3回　加藤春彦，増田　章
4回　杉原芳郎
5回　鶴橋静雄，石川忠吉
　仲田祐三
7回　鈴木春次
9回　松山　博，落合準一
10回　青島　徹，加藤良範
14回　松下久三，寺島　登
　宮崎　貢，熊沢　栄
15回　村松　晃
16回　三輪和夫，巻田治平，
　町塚道夫
17回　増田晴雄
18回　杉本喜好，杉山恭司
20回　吉富　栄
21回　田中卓馬，勝間田義仁
22回　多々良幸夫，竹島　稔
　阿部泰生
25回　石川昭一，木野令彦
　杉本計三，近藤甚之助
　黒石博次
26回　宮崎　順
27回　山中延夫，村松弘一
36回　大塚博之
【8千円】
9回　広住治夫
【7千円】
6回　岩崎　昇
25回　木村富士雄
【6千円】
9回　田村　裕，大畑徳次郎
　大石　馨
13回　藤田督一
21回　小幡　旭，木野圭祐
26回　田中育子，池田千鶴子
　伊井祺子，佐野順香
　村田とし子，中野朝子
　鈴木寿美，法月久恵
27回　松島源八，五条正市
28回　藤村　稔，良知成恭
31回　山本武恒
【5千円】
9回　山本立蔵
14回　野口駿一
16回　吉田賢治
18回　増田喜久雄，加藤芳郎
21回　村松仁郎
22回　青野克巳
25回　大石　稔，見原光利
36回　長谷川宏
【4千円】
33回　川口松男，鈴木淳弘
【3千円】
11回　石間稲生
17回　塚本達弥
21回　橋本寅雄
25回　海野宣次朗
【2千円】
54回（56年3月卒業生）
　336名
672,000円

母校の近況

好調だった大学合格者

―東大五名、京大九名―

▼スポーツ・文化面でも活躍▲

昭和五十五年度の大学合格者の発表は、三月二十日の東京大学をもって一まず終わった。国公立大学の合格者は百六十一名（現役百三十二名）でほぼ例年並みであったが、その内訳は東大五名、京都大九名、東北大九名、名古屋大七名、金沢大十名、地元静岡大は七十四名にも及んだ。また、私立大も早稲田大二十四名、慶応大十七名をはじめ延約四百名の合格者を出し、県下有数の受験校の面目を発揮した。

一方後輩生徒のスポーツ面では、伝統のサッカー部が全国選手権大会県大会で強敵清水東高（全国大会準優勝）と大接戦、延長戦の末PK合戦にて惜敗したものの、その健闘は県下サッカーファンから賞賛された。また剣道部は秋の国民体育大会に県代表として出場、健闘したほか、県新人大会で男子チームが準優勝に輝いた。バレー部もこのところ実力を向上、常時県ベスト四に入る好成績をあげている。

一方、文化面では、全国読書感想文コンクールに毎年優秀作品を応募し、上位に入賞を続けているが、昭和五十五年度には角川文庫コンクール県大会で優秀賞を獲得、全国コンクールでも入賞をした。文化クラブでは昭和四十年代後半から休部していた演劇部が復活、県演劇コンクールで「山椒魚だぞ!!」を上演、特に劇中に部員作曲の「Flying in the sky」という曲が好評であった。その他音楽部の定期演奏会も二十五回を重ね新聞部も昨年度百二十五号の学校新聞を発行した。美術部、写真部も毎年静岡で定期的な部展を開催している。

さらに毎年学校行事として文化講演会を開催、昭和五十六年度には母校出身の小川国夫氏を講師に予定している。

特別寄稿

戦中戦後の教育随想

山田良一

私が藤枝東高に在職したのは、昭和十六年五月から昭和四十五年三月まで、二十八年間である。この期間は太平洋戦争、戦後の復興と民主化時代、日本経済高度成長時代から低成長時代と所謂激動の時代であって教育に於てもその影響を大きく受けた時代であった。先ず校名も戦前の県立志太中学校から戦後の学制改革で県立志太高等学校に、昭和二十二年アメリカ方式の六三三四制の新制高校となった際校名をどうするか問題になった。県の教育委員会では同一市町村内の同一校種（例えば普通高校）は東西南北のような方位名で呼ぶのが望ましいと指導をしたようであるが、職員やPTAの意見は、志太地域の文化の中心校としての伝統を継承する意味からも是非志太高等学校にしたいと強い陳情をしたのである。所が二十七年の藤枝高校統合解除の際は、素直に県教委の指導に従って藤枝東高と藤枝西高となったものと思われる。

さて、激動期といえば、太平洋戦争中がその最たるものである。中国大陸、東南アジア、太平洋海域と広大な戦線は日増しに苛烈悪化の一途をたどり志太中の職員の中にも小宮山先生、太田先生、紅林先生、佐光先生など次々と召集令状が降りその補充も次第に困難であった。生徒にも予科連や船舶兵に応募するよう強制割当の通達が来てその充足に苦慮することも一再ではなかった。

昭和十七年秋、アメリカのノースアメリカンB二十五の飛来に始まり、昭和十九年から二十年にかけB二十九による本土爆撃が熾烈を極め、遂に藤枝町役場も被爆を受け新設防空壕内に待避中の大井町長や多田藤枝農学校長などが直撃弾を受け悲惨な最期を遂げられたのであった。私はこの日三年生を引率して静浜の海軍航空隊へ自給農場の勤労奉仕に行っていたが、真冬の寒さと、食糧事情が悪く僅かな米麦にコウリャン、大豆、ヒジキ、ナッパなどのまぜ飯が多く消化不良で下痢したり、栄養不足で体重が急激に減少或は風邪引きなども多く出た。また夜は電球が切れたり、盗まれることもあり、工場側に申請しても配給制の関係もあって仲々入手出来なかった。

昭和十九年度は国家の非常措置によって四年生、五年生が同時に卒業した。工場動員の前でも農村への勤労奉仕等も多々あって十分な学力もつかなかったが、生徒の希望と教師の指導で志望校を決め、学校長の学業成績証明書に学級全体の成績一覧を添付し、それぞれ上級学校に提出して進路を定めた。当時の教師は概ね一か月の半分は学校で一、二年の授業（合併授業が多く教室では机が一杯で生徒が自席に行くには机の上を移動したりした）、半月は工場動務の傍ら進路相談や成績証明書作成事務を行った。而も時に空襲警報や実際の空襲で、てんやわんやであった。

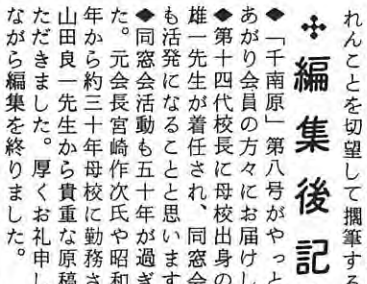
さて、四月になって進学先である専門学校や大学、旧制高校へ直ぐに行くことはできなかった。戦局が急迫して東京その他の都市の戦災が拡大する一方であり、進学先の学生も工場動員や軍隊への召集が続出する状況下で、二十年六月まで併設課程として出身校で引続き管理するよう文部省の通達があり、現実には工場動員がそのまま続いた。

昭和二十年六月二十日夜、静岡市は大空襲を受け、市街地の大半が灰燼と化した。私はこの時学校勤務期間で、六月二十一日に溝口校長先生と住友金属へ行き併設課程を終了した生徒を引取りに行く手筈になっていた。原崎先生に寮生のお世話をお願いはしたが、二十日の夜は心配でよく眠れなかった。夜が明けるのを待って古ぼけた自転車を踏みながら汗だくになって登校し、溝口校長先生に前後処置の指示を仰いだ。勿論国鉄・静鉄バスも電話も不通である。最悪の場合は単身徒歩で（国民服に戦闘帽、巻脚絆姿に日の丸弁当）現地まで行く覚悟で藤枝警察署まで行った。警察署には救援用のトラックが一台消防団員や医者などを乗せて待機していた。早速警察署長に面会を求めて緊急の要件を話し同行の許可を求めた。幸いにも生徒の父兄であり学校医で日常心安く願っている小川眼科医がいて助け舟を出して下さったのでうまく行き、同乗を許された。安倍川橋を渉り新通り付近に差しかかると市街地は瓦礫と所々くすぶりの煙とまだ片付いていない死体までがあり、惨憺たる状態であった。県庁前で救援トラックを降して頂き徒歩四十分後住友金属に着いた。驚いたことに工場は跡形もなく廃墟と化し多くの機械類は鉄屑となり灰や焼残りの木切れと共に散乱し、空地や道路には昨夜落下された硝い弾筒が多数散乱、駈けつけた従業員も為すすべもない有様であった。私は会社の幹部に会い引率職員と生徒の安否と所在を尋ねた所、多分大丈夫と思うから探して欲しいとのことであった。暫くして原崎先生に遭う。健在である。相互に手を握り感胸に迫って言葉も出ない。「生徒はどうかね。」「お蔭で全員無事です。」「警戒警報と同時に有度山へ避難しました。」「現在は勝手な行動をとらないように指示してありますからその辺にいますよ。」とのこと。確かにいた。兎に角一人残らず健在であったことはこの上ない喜びであった。

やがて工場責任者と面談、かねての計画に従って生徒一同を引取り夕刻開通した列車で帰省、夫々の家庭へ帰宅させることができた。

戦時中の教育は「滅私奉公」「お国第一」の教育理念で一貫したものであって何人もこれに疑念を抱く者はなかった。所が戦後は痛ましい敗戦から立上り、教育理念も民主主義、個人主義、自由主義となり百八十度転換した。明朗で人間性を思うままに伸ばそうとするプラス面と自己本位で他人の迷惑は意に介しない奔放性、非行や集団暴力の横行、落ちこぼれなどマイナスの面も頻発して社会問題になっている。所で戦後各種のスポーツが幅広く活発化したことは社会を明るくし、健全な方向に進める上に喜ばしいことであると信ずる。志太高でも戦後間もなく食糧増産のために半減した運動場を復旧してサッカーや野球などが盛んになった。特にサッカーは志太中創立以来の校技として重視されて来た。昭和三十二年静岡国体のサッカー主会場にも指定され、急速に発達した。国体に関連して講堂兼体育館が新設され、グラウンドは正副二面必要であるとして既設グラウンドに西隣して増設する青写真を作り、地元市町村や県当局に陳情を展開したが、緊縮国体という当局の方針で遂に実現はしなかった。この国体では天皇、皇后両陛下が行幸啓になり、山口市長、野呂校長先生が先導され、両陛下の御前に於て高校サッカーの決勝が行われ、藤枝東高チームは堂々と優勝の栄冠を獲得した。また、この日OBの志太サッカークラブも優勝した。校技サッカー万歳。サッカーの町藤枝万々歳で、学校も市民もパレードで歓喜に湧き立った。サッカーの国体優勝を契機にあらゆるスポーツが張切り、大学進学率も躍進するという校運隆昌期を迎え、校舎も木造二階建が姿を変えて逐次鉄筋三階建になり、次々と教育環境が整備されていった。

その後、市内小学校のサッカースポーツ少年団、中学校、藤枝市役所その他の社会人サッカー等幅広く盛んになり、藤枝東は殆ど毎年インターハイ、国体、正月の全国高校選手権大会に出場、優勝又は上位進出という黄金時代を築いた。昭和四十一年は三冠王の栄冠に輝いた。富沢、山口、菊川、松永章、碓井諸君など全日本級選手も多数続出し全国に名門藤枝東の名を高からしめた。顧わくば現在の生徒諸君、輝かしい伝統と栄誉を担い遙かなる将来に偉大な夢と希望を抱く藤枝東の若人達よ、堂々自重自愛し悔いなき人生を送られんことを切望して擱筆する。



予科練入隊の壮行会

昔の面影を残す松並木

✣編集後記✣

◆「千南原」第八号がやっとできあがり会員の方々にお届けします。◆第十四代校長に母校出身の曽根雄一先生が着任され、同窓会活動も活発になることと思います。◆同窓会活動も五十年が過ぎました。元会長宮崎作次氏や昭和十六年から約三十年母校に勤務された山田良一先生から貴重な原稿をいただきました。厚くお礼申しあげながら編集を終りました。